



ア ト リ エ 訪 問

第 5 回

舟越 桂

彫刻家

静かなたたずまいの中に、
凛とした強さを感じさせる舟越桂の彫刻。
彼の作品はどのような場所で生み出されているのだろう。
ある日の夕方、一軒家を改装したというアトリエを訪れた。

撮影 永野雅子

ガラス戸からあたたかな光がもれている。呼び鈴がないため、戸をノックすると、「どうぞ。靴を履いたまま上がってください」と、笑顔の舟越さんが迎えてくれた。

—— アトリエには、いつも何時頃に入られるのですか。

舟越 だいたい、夜の6時から7時ぐらいに入り、明け方までいます。完全な夜型ですね。

ここにアトリエを構えて10年になるかな。築30年以上の小さな一軒家を改装して使っています。2階はデッサンをしたり仮眠をとったりする場所、1階は木を彫る場所です。

ちょっと散らかっていますが、僕は物をしまわずに外に出しておくのが好きなので、このほうが居心地がいいんです。

—— 壁にメモがたくさん貼ってありますね。

舟越 思いついたことは、忘れないうちに紙に書くようにしています。



アトリエには、これまでに制作した作品が並ぶ。
手前にあるのは「水に映る月蝕」(2003年)。

作品をつくるときの心得になるし、何らかの形で作品に結び付くかもしれないと思って。

—— 「アトリエは迷いの場である」と書かれたメモがありますね。

舟越 木彫を始めて30年以上になりますが、これまで自分がやってきたスタイルに固執したくないと、いつも思っています。そのときに感じたことや出会ったことを受けて、新しい作品を生み出していきたい。だから、そのつど迷い、考えている気がします。

制作中、なかなか作品が「立ち上がってこない」と感じるときがしばん苦しいです。それでも、制作を続けていくと、あるとき「あっ、ここにノミを入れればいいんだ」と気づく。そういうとき、僕は失敗を恐れずにガーッとノミを入れるようにしています。そうすると、作品が生き生きと立ち上がってくるんです。それは、作品が「語り始めたな」と感じる瞬間でもあります。

—— そのときは、作品と対話しているような感じなのでしょう。

舟越 いや、対話というより、緊張感をもって「挑む」ような感じです。そこでノミの入れ方を間違えたら、作品は急にガラガラと崩れて、つまらな



いものになってしまいますから。

丁寧に彫ればいいというものでは、決してない。僕はあえて「丁寧さは重要でない」と、自分に言い聞かせています。丁寧にやろうとすると甘い作品しかできない。強さを感じられないものになってしまうんです。

作品は、人格が感じられるところまでつくっていきます。だから、できあがった作品が運び出されて、木くずだけが残ったアトリエに入ると、すごく寂しくなります。最近はずいぶん慣れてきましたけど(笑)。

—— ずっと人物像を彫られていま

すが、違うモチーフを彫ってみたいと思うことはありますか。

舟越 ほとんどありませんね。僕は子どもの頃から、人間の姿にとっても興味がありました。人間の姿を借りて作品をつくるときにだけ、僕なりの世界を表現できる気がしています。

ひとりの人間の姿としっかり向き合うことができれば、この世界を知ることができるんじゃないかと考えています。「人間とは何か、世界とは何か」ということを、ひとりの人間の姿を通して考え、表現していきたい。そんなふうに思っています。



壁にメモが貼られている。厚紙が好きで、菓子箱などを切って、それに書くそう。



手前にある鉛筆立ては、自作したもの。道具はしまわず、外に出しておく。



ふなこし・かつら
1951年岩手県生まれ。
彫刻家。東京造形大学彫刻科卒業、
東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。
ヴェネチア・ビエンナーレ、シドニー・ビエンナーレ他、
国際的にも活躍する。第18回平櫛田中賞、
第33回中原悌二郎賞を受賞。東京造形大学客員教授。
個展「New Drawings」がANDO GALLERY
(東京都江東区)で開催中(〜6/28)。